

連載

【試論】民族総福音化への道 (4)

先ず早天祈祷から④



副総裁兼事務局長 手束 正昭
(高砂教会牧師)

「早起き会若しくは朝起き会」というグループがある。「倫理」とも自称し、自分達は決して宗教ではないと主張している。しかし、私から言わせれば、極めて日本的な倫理的な宗教である。彼等は朝五時(冬は五時半)に一箇所に集まり、教えを受け、証しをし合う。「何故そんなに早朝に」と普通誰しもが思うところであるが、それには理由がある。

「倫理」の教えの中心は、「我情」(わがまま)こそが人間の不幸の根本原因である、とするとそこにある。それ故に、この「我情」を取り除くことが幸福な人生を築く秘訣ということになる。この人間の我情は先ず朝起きることから始まる。そこで、一日の始まりに「我情」に勝利し、朝早く起きる習慣をつけることが肝要となる。ところで、人間が眠るのも、目覚めるのも、自分の力でしているのではない。大自然(宇宙)の大きな力によるのである。それ故に、目が覚めたならば、「我情」を克服してサッと起き、大自然(宇宙)のリズムに乗った生活をつくることに幸福をもたらすのである。かくして、人間の「我情」を捨てて大自然(宇宙)の法則に生きることが「倫理」の要諦となる。

この「倫理」の主張には、何がしかの真理がある。「我情」とは「自我」とも言い換えることが出来るし、聖書のことばを用いるならば「肉」である。即ち「罪と欲の法則」が支配する「肉」を捨てて、「いのちの御霊の法則」(ロマ八、二)に従って歩めというパウロの

主張に相似している。けれども決定的相違がある。それは聖霊の働きを認識し体験しているか否かである。

確かに人間は決意し、決断することによって、ある程度までは「我情」を捨てて大自然の法則に生きることは可能である。けれども、それには相当の意志の力が必要であり、長く続けることは至難である。けれども、聖霊のバプテスマを体験したクリスチャンにとつては、そう難しいことではない。聖霊の助けがあるからである。聖霊が支え導いてくれるのである。時として私が目覚まし時計をかけ忘れた時など、定時になると「トン」と肩を叩かれビックリして起きる。しかし誰も居ない。「あ、今度も聖霊様だ」と感謝しながら、急いで身支度を整えることがよくある。

聖霊は「助け主」であって、我等の弱い意志と肉体を励まし支えて、そのように導いてくださるのである。人間の意志や肉体の力では長続きできなくとも、聖霊の支えと助けによって確実に早天祈祷の励行が可能になるのである。故に、早天祈祷励行のためには、聖霊の満たしが必要であり、先ず聖霊の満たしを求めることこそ、早天祈祷励行の秘訣なのである。韓国の教会であれ程盛んに早天祈祷に人々が集まるのは、韓国の置かれた社会的状況が日本などと比肩し難く厳しく、そのために人々が神にすがって必死になつて求めざるを得ないという事情もあるが、同時に韓国のキリスト教は日本の

それよりも遥かに霊的であり、聖霊に満たされたクリスチャンが多いからである。

その上、人間の霊性は目覚めて間もない時が最も活発に働いている時であり、聖霊の働きに触れ易く、聖霊との交わりが容易となる。その結果、早天祈祷によっていよいよ聖霊の満たしが強められ、その人の内側から愛と力と喜びが湧き溢れ、聖なる輝きが放たれるようになる。それにより、その人は聖なるオーラの輝きをきらめかせ、酷く魅力的な人間となっていく。早天祈祷の副産物としての祝福である。

かくて、早天祈祷は好循環をもたらす。早天で聖霊に満たされ、いよいよ早天祈祷会を守ることが容易となり、更に聖霊に満たされ、もつと早天祈祷会を守り易くなつてくるといった次第である。そして遂には、早天祈祷が習慣となり、毎日の当然の行為となる。そのため何かの都合で早天祈祷が出来ない時は、却って一日の調子が悪くなるので、早天祈祷をしないと収まらなくなってしまうことになる。そうなれば、しめたものである。ぐんぐんとその人の霊性は高められていき、正に次のパウロの言葉の如く、その身に実証されることになる。

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映るように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」(IIコリ三・一八)。